

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

ドヴォルザーク:スラヴ舞曲集(全曲)

ラファエル・クーベリック(指揮)

バイエルン放送交響楽団

シューベルト:弦楽四重奏第14番《死と乙女》、

第13番《ロザムンデ》

イタリア弦楽四重奏団

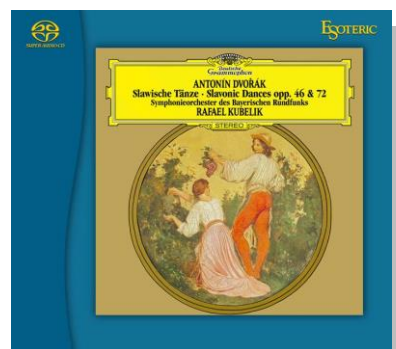
エソテリック(株)独占販売 2017年9月15日 発売

ドヴォルザーク:スラヴ舞曲集(全曲)

ラファエル・クーベリック(指揮)

バイエルン放送交響楽団

- 品番:ESSG-90169
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034221875
- レーベル:DG(ドイツ・グラモフォン)
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:管弦楽曲



シューベルト:弦楽四重奏第14番《死と乙女》、

第13番《ロザムンデ》

イタリア弦楽四重奏団

- 品番:ESSD-90170
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034221882
- レーベル:DECCA
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:室内楽曲



DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2チャンネル・ステレオ[マルチなし]

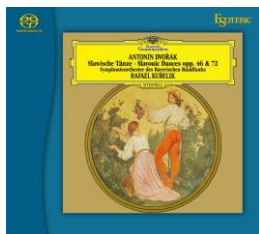
美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ドヴォルザーク:スラヴ舞曲集(全曲) ラファエル・クーベリック(指揮) バイエルン放送交響楽団

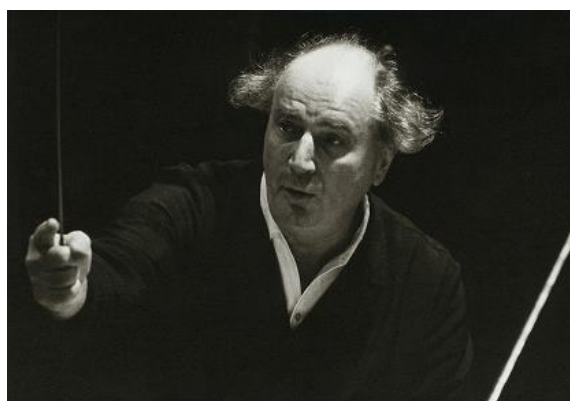
クーベリック最高の燃焼度を感じさせるアナログ時代の決定盤。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CDハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。チェコの名指揮者ラファエル・クーベリック(1914~1996)は、アナログ時代のクラシック・ファンには親しみ深い存在で、当シリーズでもモーツァルトの交響曲第 35 番・第 40 番・第 41 番(ESSS-90060)や、ウェーバーの歌劇「魔弾の射手」全曲(5 グレイト・オペラズ ESSG/D-90109-17 のセットに収録)、そしてスメタナの「わが祖国」全曲(ESSG-90153)を発売し、ご好評をいただきました。今回は、1960 年代初頭から 1970 年代半ばにかけてクーベリックがドイツ・グラモフォンに残したドヴォルザークのオーケストラ曲の録音の中でも格別の充実度で発売以来名盤として高く評価されてきた 1973~74 年録音の「スラヴ舞曲集」全曲を新たに DSD マスタリング/ Super Audio CD ハイブリッドディスク化いたします。

■心技体ともに最高潮にあった 1970 年代のクーベリック

1961 年にバイエルン放送交響楽団の首席指揮者に就任したクーベリックは、1970 年代になってその音楽活動を大きく飛躍させます。1972 年にニューヨークのメトロポリタン歌劇場の史上初の音楽監督に就任し、その軸足をアメリカにも置くことになったのです。録音面でも、1960 年代後半の 4 年間で費やして手兵バイエルン放送響とマーラーの交響曲全曲を録音し、バーンスタインのコロンビア盤、アブラヴァネルのヴァンガード盤とほぼ同時期に完成したステレオ録音による最初期の全集の一組を完成させるという大業を成し遂げ、1970 年代に入るといよいよドヴォルザーク作品に目を向けます。交響曲全集は 1971~73 年にかけてベルリン・フィルと、その後 1973~76 年にかけて交響詩、序曲、そして大作スターバト・マーテルをバイエルン放送響と、伝説曲をイギリス室内管と続々と録音し、故国チェコの大作曲家への熱いオマージュを思わせる名盤を生み出しています。クーベリックは並行して、バイエルン放送響とウェーバーの歌劇《オベロン》、ワーグナーの歌劇《ローエングリン》やプフィツナーの歌劇《パレストリーナ》といったオペラ全曲盤、ヤナーチェクの《グラゴール・ミサ》などを録音し、さらに世界の 9 つのオーケストラを振り分けてのベートーヴェンの交響曲全集を手掛けるなど、録音アーティストとして八面六臂の活躍ぶりでした。



© Siegfried Lauterwasser / DG

■最高の燃焼度を感じさせる「スラヴ舞曲集」

1973～74年に録音された「スラヴ舞曲集」は、これらの充実した録音活動の中でも、ひとときわ輝きを放つ名演といえるでしょう。クーベリックは一種フルトヴェングラー的な気質を持っていたとされ、聴衆を前にしたライブとセッション録音とは異なる印象を与えることがありました。セッション録音でのバランスの良さとクオリティの高さ、そして聴衆を背後に感じた時のライブでの破格の燃焼度。この2つはいずれもクーベリックの音楽の特質を示したのですが、「スラヴ舞曲集」はいわばセッション録音の緻密さにライブの燃焼度と即興性を持ち込んだ演奏といえるでしょう。全体的に湧き立つような早めの推進力のあるテンポが採られ、その中で野卑にならないギリギリのところで見事な緩急が付けられています。細部の彫琢は入念に整えられており、ちょっとした打楽器や木管のアクセント一つが意味深く響き、対旋律が埋没することなく絶妙なバランスで引き立つよう目配りされていることで立体感を増しており(立体感という点ではヴァイオリン・パートを左右に分ける配置も功を奏しています)、指揮者とオーケストラが作品を知り尽くし文字通り一体化していることが判ります。熱狂と哀愁とが絶妙に交錯する作品の本質をあくまでも自然な流れの中で描き出す手腕は、全盛期のクーベリックならではのといえるでしょう。クーベリックは1955年にウィーン・フィルを指揮してこの曲集をモノラル録音(英デッカ)しており、オーケストラのローカルな響きの魅力に聴くべきものはありますが、オーケストラの機能性の高さ、解釈の徹底度を考えると、このバイエルン放送響盤の優位は揺るぎません。この曲集はフルトヴェングラー、カラヤン、バーム、バーンスタインといったレコードでの人気指揮者が全曲盤を残さなかったにもかかわらず、LP初期から定盤とされる録音に恵まれており、ステレオ時代に入ってから50年代のドラティ/ミネアポリス響(米マーキュリー)、60年代のセル/クリーヴランド管(米コロムビア)、70年代のノイマン/チェコ・フィル(スプラフォン)などが決定盤とされてきました。このクーベリック/バイエルン放送響盤は、それらと並んで発売以来現在に至るまで、この曲集の本質を最も鮮やかに描き出した演奏として、カタログから消えることなく聴き継がれてきています。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音は1950年代からミュンヘンの録音会場として使われ、その優れた音響で知られるヘルクレスザールで行なわれました。1986年にガスタイク・フィルハーモニーが出来るまではバイエルン放送響の定期演奏会もすべてここで開催されていました。1800人以上を収容できる典型的なシューボックス形式のホールで、細部をマスクしすぎない適度な残響感、高域から低域までバランスのとれた響きの2点で、録音には最適であり、マウリツィオ・ポリーニも好んでそのソロ録音をここで行なってきました。ドイツ・グラモフォンによるクーベリックとバイエルン放送響の録音も一部を除いてこのホールで行なわれており、会場の特性を知り尽くした安定感のあるバランスが聴きものです。ドイツ・グラモフォンならではのオーケストラ全体を俯瞰できるサウンドの中で、木管や打楽器など重要なソロ・パートが適度な明晰さを持ってクローズアップされています。名盤だけにデジタル初期にCD化されて以来、オリジナルスでのリマスターのほか、2011年にはSHM-SACD仕様でもシングルレイヤーのSuper Audio CDとして発売されてきました。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。



■「作品のはち切れるような生命力を生かした、いわば理想的な演奏」

『作品のはち切れるような生命力を生かしながら、一方ではデリケートなニュアンスの移ろいを十二

分に併有した、いわば理想的な演奏。どんなに激しい部分でも、ダイナミックでリズムが弾み、バランスは最高に保たれ、トゥッティは濁らず、音彩は虹のように多彩に変化してゆく。典雅で詩情に満ち、すみずみにまで神経と情感が行きとどいている。』(『レコード芸術』1976年6月号、推薦盤)

『クーベリックはこれらの曲を完全に手中に収め、動的な激しい部分と甘美で抒情的な部分とのバランスを巧みにとりながら、それぞれの曲の性格をももの見事に再現している。どの曲も実に豊かな表現で、チェコ人としてのクーベリックの知の躍動が全編に感じられる。オーケストラもクーベリックの棒によくついていて好演である。』(志鳥栄八郎、『レコード芸術別冊・クラシック・レコード・ブック VOL.2 管弦楽曲編』、1985年)

『クーベリックの音楽的特質は、何よりもそのポリフォニックな声部への配慮と、その各声部へのセンシティブでありながらも入念な表情付けにある。ドヴォルザークの民族精神の発露ともいべきこの曲集においても、クーベリックはその豊かな音楽性を発揮して、稀に見る立体的で自発的に満ちた音楽の飛翔を具現している。長年にわたりクーベリックの薫陶を受けていたバイエルン放送交響楽団の音楽性の高いアンサンブルの有機性も特筆すべきであろう。』(国土潤一、『クラシック名盤大全・管弦楽曲編』、1998年)

『当盤では、第1番の冒頭からトレモロを叩き出すティンパニが強い存在感を主張し、推進力に富んだ快演を展開。全体的に早めのテンポを設定しながら、単に勢いよく弾むだけではなく、副次的なモチーフや伴奏音型にも入念な表情が施されている。商業録音の成果に関しては、とかく中庸と評されることが多かったクーベリックであるが、当盤所収の演奏は、第5番、第7番、第9番など、至るところで音楽が沸き立っているのが特徴的。この曲集に対するクーベリックの並々ならぬ心情がストレートに反映された名盤である。』(満津岡信安、『レコード芸術選定 クラシック不滅の名盤1000』、2007年)

『クーベリックはチェコの人々にとって《スラヴ舞曲集》はきわめて神聖な音楽であると語っているが、そうした作品のもつ神聖さと民族性を、このように豊かな音楽性をもってバランスよく表現した演奏もなまいだろう。作品を完全に手中に収めているだけでなく、1曲1曲が常に清新な喜びを持って表現された演奏はいかにも品格美しく詩情豊かであり、舞曲集らしい華やぎや流麗さにも不足がない。中でも抒情的な部分での繊細な表現力は素晴らしい聴きもので、長年の手兵であるバイエルン放送交響楽団もその妙演に見事にこたえている。』(歌崎和彦、『クラシック名盤大全』、2015年)

[収録曲]

ドヴォルザーク

スラヴ舞曲集 作品 46

- [1] 第1番ハ長調 作品 46 の 1
- [2] 第2番ホ短調 作品 46 の 2
- [3] 第3番ニ長調 作品 46 の 3
- [4] 第4番ヘ長調 作品 46 の 4
- [5] 第5番イ長調 作品 46 の 5
- [6] 第6番変イ長調 作品 46 の 6
- [7] 第7番ハ短調 作品 46 の 7
- [8] 第8番ト短調 作品 46 の 8

スラヴ舞曲集 作品 72

- [9] 第9番ロ長調 作品 72 の 1
- [10] 第10番ホ短調 作品 72 の 2
- [11] 第11番ヘ長調 作品 72 の 3
- [12] 第12番変ニ長調 作品 72 の 4
- [13] 第13番変ロ短調 作品 72 の 5
- [14] 第14番変ロ長調 作品 72 の 6
- [15] 第15番ハ長調 作品 72 の 7
- [16] 第16番変イ長調 作品 72 の 8

バイエルン放送交響楽団

指揮: ラファエル・クーベリック

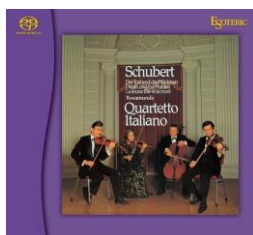
[録音]1973年12月10日、13日、16日(1-8)、1974年6月(9-16)、ミュンヘン、ヘルクレスザール [アナログ・レ

コーディング] [LP 初出]1-8:2530 466(1975 年/スケルツォ・カプリチオーソとのカップリング)、9-16:2530 593 (1976 年/序曲「わが家」とのカップリング) [日本盤 LP 初出]1-8:MG2489(1975 年 4 月 21 日/スケルツォ・カプリチオーソとのカップリング)、9-16:MG1010 (1976 年 7 月 1 日/序曲「わが家」とのカップリング) 1-16 の全曲が LP1 枚になったのは 15MG3055(1984 年 11 月 1 日)が初めてである。

[オリジナル・レコーディング][エクゼクティヴ・プロデューサー]Dr.ハンス・ヒルシュ、ルドルフ・ヴェルナー(9-16)[プロデューサー]ハンス・ヴェーバー[バランス・エンジニア]ハインツ・ヴィルトハーゲン

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社) [Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ)) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ) [解説]諸石幸生 藁科雅美 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



シューベルト:弦楽四重奏第 14 番《死と乙女》、 第 13 番《ロザムンデ》 イタリア弦楽四重奏団

明るく豊麗な歌に溢れたアナログ時代のシューベルト弦楽四重奏曲録音の最高峰。

■ ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回は 20 世紀後半の弦楽四重奏演奏史に大きな足跡を残し、日本でもいまだにファンが多いイタリア四重奏団の名演中の名演、シューベルトの「死と乙女」「ロザムンデ」の 2 曲を 1 枚に豪華カップリングした定盤が新たなリマスタリングで登場します。当シリーズに弦楽四重奏のアルバムが登場するのは、2014 年のアルバン・ベルク四重奏団のハイドン「皇帝」とモーツァルト「狩」(ESSW-90101)以来久しぶりとなります。

■ 第 2 次大戦後の弦楽四重奏団の新しい潮流

第 2 次大戦後、欧米各地で新しい世代による弦楽四重奏団が続々と誕生しました。アメリカのラ・サール(1946 年結成)、ジュリアード(1949 年結成)、イギリスのアマデウス(1948 年結成)、チェコのスメタナ(大戦中の 1943 年結成)などがその代表的存在で、20 世紀前半の伝統を受け継ぎつつ、戦後の新たな価値観を取り入れ、弦楽四重奏の歴史に新風を吹き込むことになりました。録音面でも新しく開発された LP フォーマットを生かし、作曲家別の全曲録音など旺盛な録音活動を行ない、世界中に新たな室内楽ファンを生み出したのでした。

■ 名前の通り歌心あふれるイタリア四重奏団

そうした世界的潮流をイタリアで担ったのがイタリア四重奏団です。1945 年に作曲家マリピエロの提唱により北イタリアのレッジョで結成され、当初は「新イタリア弦楽四重奏団」と名乗っていましたが、1951 年に「新」を取って「イタリア弦楽四重奏団」と改称。以後、イタリアの音楽家らしい豊麗な歌心、よく響きあう厚みのある独自のサウンドで一世を風靡しました。結成当初のメンバーは、レッジョ出身のパオロ・ボルチアーニ(第 1 ヴァイオリン、その名を冠したコンクールは 3 年ごとに開催され若手弦楽四重奏団の登竜門)、ジェノヴァ出身のエリーザ・ペグレッフィ(第 2 ヴァイオリン)、ヴェネツィア出身のリオネッロ・フォルツァンティ(ヴィオラ)とフランコ・ロッシ(チェロ)で、彼らは学生時代からの仲間同士でした。1951 年にヴィオラがピエロ・ファルツリに交代し、この第 2 次メンバーでほぼ 30 年近く活動し、一時代を築き上げていきます。1979 年にヴィオラがさらにディーノ・アッシオラに交代し、翌 1980 年に解散しています。

■名盤が残されたフィリップス録音

結成直後の 1948 年から英デッカに録音を開始し、英コロムビア (EMI) を経て、1965 年から蘭フィリップスに移り、演奏レパートリーの中心に置いていたモーツァルトとベートーヴェンの全曲 (それぞれ 1966~73 年、1967~75 年にかけて録音) のほか、シューマンとブラームス全曲、ハイドン、ボッケリーニ、シューベルト、ドビュッシー & ラヴェル、ドヴルザークの主要四重奏曲、そして珍しいところではウェーベルンの作品集までも録音しており、いずれもアナログ時代を代表する名盤として高く評価されていました。解散する前年にはポリニーとブラームスのピアノ五重奏曲を独 DG に録音し、これもまたポリニー初の室内楽録音となったことで大きな話題を巻きました (結果としてこれがイタリア四重奏団としての最後の録音ともなりました)。



■シューベルト弦楽四重奏曲録音の最高峰

シューベルトの弦楽四重奏曲はデッカに第 8 番、第 13 番、コロムビアに第 2 番、そしてフィリップスに第 10 番、第 12 番断章 (2 回)、第 13 番、第 14 番 (2 回)、第 15 番の録音を残しています。今回ハイブリッドディスク化されるのは活動後期の第 13 番「ロザムンデ」と第 14 番「死と乙女」のカップリングで、後者はヴィオラがアッシオーラに交代した直後の再録音です。熱のこもった輝かしいカンタービレ、洗練された歌心、決して重くならないリズム、伸びやかで自発的なアンサンブルなど、20 世紀後半から主流になった合奏の精度の高さを極めていく方法とは別のところで弦楽四重奏という方法論を突き詰めていったイタリア四重奏団の特質がはっきりと映し出されています。両曲とも遅めのテンポで丁寧に細部を描いており、曲想が変化する際のちょっとしたためにも音楽への繊細な思い入れが感じられます。ヴィオラ交代前と交代後の音楽性の微妙な変化を聴き比べるのも一興でしょう。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音はスイスのラ・ショー・ド・フォンにあるサル・ド・ムジーク (音楽ホール) で行なわれました。1955 年に開場し、約 1200 席を擁するコンサートホールで、その優れた音響効果のゆえにステレオ時代になってレコード録音にも多用されてきました。イタリア四重奏団のみならず、アルテュール・グリムオー、イ・ムジチ、ボザール・トリオ、クラウディオ・アラウなど特にフィリップス・レーベルの室内楽やソロの名録音の多くがこのホールで制作されたこともあり、落ち着いた艶のある響きによる録音はフィリップス・サウンドの一つの看板ともなりました。このシューベルト 2 曲も CD 初期からの定番で、20 ビット・リマスター、あるいは第 13 番のみはペンタトーンによるリミックス+リマスターされたハイブリッド盤もありますが、今回は新規で DSD リマスターが行なわれます。これまでの企画同様、使用するマスターテープの選定から、最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターとに、入念に調整された ESOTERIC の最高級機材を投入、また MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■「ステレオにきく《死と乙女》のベスト」

『《ロザムンデ》は練りに練られた見事なアンサンブルが、一種独特の柔らかい抑揚を持って、シューベルトの抒情に満ちた旋律を歌っている。』(『レコード芸術』1978 年 1 月号、推薦盤)

『以前の演奏に比べ今回は大変に緊密なアンサンブルで、しかもゆるぎのない安定感がある。とくにアインザッツはシャープで気持ちがいい。しかも誇張にならぬようきめ細かく歌わせている。変奏曲の第 2 楽章がいい例だ。そしてこの歌が熱気を帯びていながら節度をわきまえている。《死と乙女》でこれほどドラマを感じ焦る演奏は少ない。』(例によって音色は明るい表現意欲がみなぎり、重量感に富んだ《死と乙女》の演奏を聴いていると、運命の重圧にあえぐ巨人の熱い吐息を浴びるような思いがする。第 1 楽章第 2 主題冒頭の動機や、第 2 楽章のコーダにみられるあこがれのムードとの対比のさせ方も、まさにベテランの芸で心憎いうまきがある。これはステレオにきく《死と乙女》のベストだろう。』

(『レコード芸術』1981年4月号、特選盤)

『彼らの身上は、やはりイタリアの風土を反映したともいえる明るく透明なリリズムであろう。その中でも、彼らは音楽をただ流してゆくのではなく、しっかりした造形を見せた。シューベルトはそうした彼らの音楽性の一端を見せたにすぎない。』(藤田由之、『レコード芸術別冊・クラシック・レコード・ブック VOL.4 室内楽曲編』、1985年)

『イタリア SQ は 1965 年にも録音していたが、あらゆる意味でこの 79 年盤が勝っている。ヴァイオラが交代した直後の録音で、同時期にはポリーニと共演したブラームスのピアノ五重奏曲の名盤も生まれた。彼らは現代のクアルテットのようなメカニックを持ち合わせていないが、ヨーロッパの伝統的な室内楽の佇まいの中で旧盤よりもその表現を一層深化させている。冒頭テーマから素晴らしい弓のスピードを感じさせるが、これにより表情に強さと躍動感が生まれており、持ち前の明るい音色はさらに磨かれ、ソット・ヴォーチェがえもいわれぬ表情を浮かべる作曲者のさまざまな心象風景が柔らかく揺れ動く絶妙さは筆舌に尽くしがたい。』(芳岡正樹、『レコード芸術選定 クラシック不滅の名盤 1000』、2007年)

[収録曲]

シューベルト

弦楽四重奏曲第 14 番ニ短調 D810《死と乙女》

[1] 第 1 楽章 アレグロ

[2] 第 2 楽章 アンダンテ・コン・モート

[3] 第 3 楽章 スケルツォ(アレグロ・モルト)

[4] 第 4 楽章 プレスト

弦楽四重奏曲第 13 番イ短調 D804《ロザムンデ》

[5] 第 1 楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo

[6] 第 2 楽章 アンダンテ

[7] 第 3 楽章 メヌエット

[8] 第 4 楽章 アレグロ・モデラート

イタリア四重奏団

パオロ・ボルチアーニ(第 1 ヴァイオリン)

エリザ・ベグレッツィ(第 2 ヴァイオリン)

ピエロ・ファルツィ(ヴァイオラ)[第 13 番]

ディーノ・アッシオーラ(ヴァイオラ)[第 14 番]

フランコ・ロッシ(チェロ)

[録音]1976年11月16日~27日(第13番)、1979年10月21日~24日(第14番)、スイス、ラ・ショー・ド・フォン、サル・ド・ムジーク [アナログ・レコーディング]

[LP 初出]第 13 番:9500 078(1977年)第 14 番:9500 751(1981年)

[日本盤 LP 初出]第 13 番:X7746(1977年11月25日/弦楽四重奏曲第 10 番とのカップリング)、第 14 番:25PC157(1981年2月28日/弦楽四重奏曲第 12 番「四重奏断章」とのカップリング) この 2 曲のカップリングは CD 時代になってからで、32CD3076(1986年9月25日)が初めてである。

[オリジナル・レコーディング] [プロデューサー]ヴィットリオ・ネグリ

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ)) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ) [解説]諸石幸生 門馬直美 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242